

甲陽だより

発行所
西宮市甲子園高野町3番7号
甲陽学院同窓会
電話西宮(078)41-6222 香0623番
郵便番号 603 3
印刷所
清原印刷社
石川印刷出版社
神戸市兵庫区中道通3丁目3-6
電話神戸(078)575-3761(代)

理事長就任のことば

辰馬 龍雄

二十一世紀を担う若人の教育の重要さは時代の進展と共に益々その深みを感じるのです。この話題の二十一世紀はそう遠い話ではありません。今生きている三人に二人は来世紀に生活しなければなりません。教育は人類繁栄の基礎であります。このように考えてゆくと未来の幸せな社会に生きる若人をあずかっている甲陽学院の使命は誠に重く、関係者の責任の重大さを痛感するものであります。人生には喜びもあり悲しみもあります。悲しみの最たるものは死であります。

多年本学院の理事長として貢献された辰馬修一氏の昨年五月の逝去は、未だ私達の記憶に新しい悲しみであります。辰馬一門の一人として、また友人として哀惜に堪えません。同氏の逝去により設立者辰馬吉男会長より私に理事長の要請がありました。私もとり浅学非才でありますがお役に立つならばという事でお引受けをいたしました。私の亡父辰馬勇治郎が初代理事を勤めていた事でもあり、何かの因縁と思っております。

私、昭和三十八年大多数の市民皆様のご推挙により、また本校同窓会諸兄の強烈なご支援によって西宮市長に立候補し当選いたしました。三期十二年の歳月を「緑と幸せのまじり」づくりを合言葉に、教育文化の薫り高い

まちづくりを基本施策の一つとして文教住宅都市を宣言いたしました。凡そ人間成長の過程に於て生涯教育の流れの中で最も重要な時期は、中高時代であります。

辰馬本家第十三代故辰馬吉左衛門翁の勇断により、大正八年夏、財団法人を設立、その翌年設立認可を受け開校した辰馬学院甲陽中学校も、戦前戦後を通じてそれぞれの時代の変遷にもよく堪え、我国私学の名門校として発展しています。「事業は人なり」の言葉があります。学院の今日の躍進は歴代の校長はじめ諸先生、同窓生諸兄、関係皆様が一体となつての努力の賜であり、衷心より感謝申し上げます。高等学校は「人を育てるには百年の計をもつてなす」の創立の精神に則り、練したたる新天地へと工事進捗中であります。

知徳体のバランスのとれた人間形成の道は誠にけわしいものであります。二十一世紀の幸せな社会の創造に役立つ若人のため、本校の発展のため、御父兄同窓生関係各位のご支援を念じ、生徒学生諸君の精進努力を期待してご挨拶いたします。

辰馬龍雄氏略歴

関西学院高商部卒業後米國ワシントン大学留学。阪神電気鉄道株式会社企画調査室部長。西宮市長三期十二年在職。財団法人西宮市大谷記念美術館館長。

高校の新校舎建築

目下着々と進行中

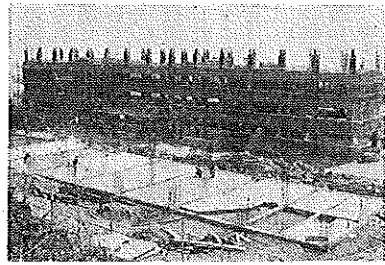
甲陽学院高等学校の移転が法人、学校側によって計画されたのは数年前からであるが、正式に学校が新校舎建築移転推進委員会を設置し本部長に学校長がその衝にあたることに決定したのは昭和五十一年六月二十一日のことであった。以来、委員会は五十一年末までに十七回開催され新校舎建築に関する全ての事項をあらゆる角度から審議し、現在に至っている。

建物概要を記すと

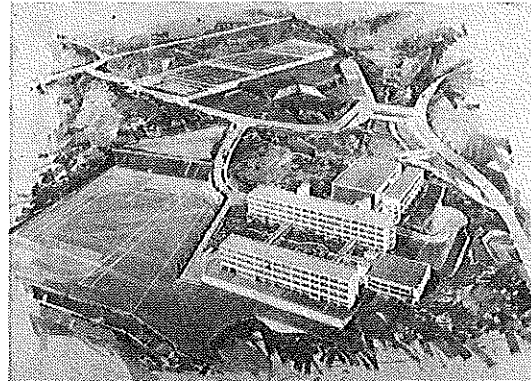
- 一、工事場所 西宮市角石町二三番地
- 一、建築主 学校法人辰馬育英会
- 一、工事規模

敷地面積 九八、四二四・〇〇㎡
建築面積 四、二七三・七〇㎡
延床面積 一、三九四・七〇㎡

施工業者 大林組が学校に完成した校舎をひきわたす時期は、昭和五十二年十一月二十日であり、高校生が新校舎で授業を正式にスタートするのは、昭和五十三年四月からである。



建築中の校舎

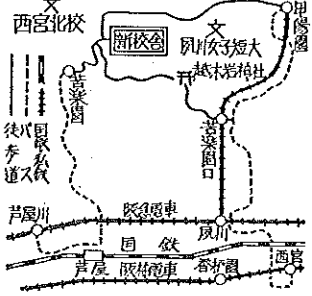


新校舎完成予想図

なお、中学校(阪神・香櫨園)は移転せず、現状のまま教育がなされることに決定している。

新校舎通学路略図

1. 阪急岩倉園口より、徒歩約25分
(越木岩神社付近より徒歩専用道)
2. 阪急岸部川、国鉄岸部より、バス乗車
岸部園下車徒歩約10分
3. 阪急甲斐園より、徒歩約20分
4. 阪神西宮より、バス甲陽園下車 徒歩約20分



—花ひらく新天地—

同窓会長
原 清

分りきったことを、ことさらに勿体ぶって七六つかしく説明するのが辞書である。といった人がいる。なるほど「鼻」という字を辞書で引いてみたら「顔のまん中の突出せる部分」とあった。

「同窓」という字を辞書で引いてみたら「同じ窓の下で共に学ぶという意、同じ学校または同じ師に学ぶこと」と記してあった。ついでに和英辞典で「同窓」という字を探してみたら「男性はアラムナス (Alumnus)、女性はアラムナ (Alumna)。男女混合の同窓会はアラムニ・アソシエーションと呼ぶ。ただしアメリカではオールド・ボーイ (ガール) ミーティングと呼ぶ方が多い」と書かれていた。いづれにしても同窓のよしみ、同じ学校出だからというだけで、千年の知己のように友好を感じ合えるのは洋の東西を超えた嬉しい事柄である。

ところで同じ同窓会でも、小学校や大学のそれよりも中

学校または高校の同窓会が一ばん楽しく、一ばん盛況なのは何故だろう。それは人生のうち、中学校時代が一ばん旺盛な心身の成熟期で、感じ易く、ふれ易く、人格形成の最重要な令期だからである。

中学、高校時代に生れた友情には功利的なものがない。偽装がない。親交度も深い。純情と純情の結びつきだから永続しがする。したがって同窓の集りも盛会になる。ことに甲陽学院のように中高一貫教育校では、既に理想的な同窓会環境が出来上っているといえよう。

その同窓会も、いよいよ来年から甲子園ならぬ甲山々麓の新校舎からの卒業生を迎え入れることになる。学校も同窓会も、文字通り第二の躍進期に入ったのである。

同窓生一万名、今こそ総力をあげて、新天地に花ひらく母校の大発展に協力しよう。

父 親

学校長
小河 清麿

わが国も、ここ新年来週休二日制が定着しつつある。自分の時間が増え、それを有意義に使うもよし、又全く何もせず無為にすごしてもかまわない時間ができるわけである。この余暇もわれわれの内部から自然湧き出たものではなくて、いわば天降りの余暇だから問題である。

先日まで朝の茶の間に、大きな話題をまいたテレビ・ドラマに「雲のじゅうたん」があった。その話題の一つは、主人公真琴の父親の「小野間左衛門」である。彼の古風な「父親の権威」を遺憾なく發揮している姿に、われわれ日本人は、このような父親像を内心では、淡い郷愁のあこがれを持ったのかも知れない。そこに描かれている人間関係に、古い昔の「家」という殻、家制度の下での家長である父親像が映し出されている。

家庭内での祝祭的儀式や宗教的儀式において、家長である父親は、その司祭であり、主役であって、家族のものは、そのあとに続いておればよい。

だから父親は、どことなくいかめしく、動作も威厳があつて堅苦しく、家の中では偉い

人であつて、家族のものは一歩離れたところから、恐る恐る眺めている存在であつた。ところが戦後は急変した。

家族法の民主化や自由と平等の意識の高揚に伴つて、直系家族制度から、夫婦家族制度へと、法規も改正され、そして核家族化が進み、家族構成も小規模化へと移行して来ているのが現状である。そこには権威ある威厳にみちたおじいさんはいない。

若い夫婦と子供達があるばかりであつて、その家族の間も、友誼化し、遊び仲間へと変貌してきている。そこへ更に余暇時代を迎えようというところになったのである。これに対してわれわれはどよう「構え」ればよいのだろうか。

昔は多くの家庭の中に働く父親の姿があつた。それを子供達は見ながら育つたが、今はマイ・ホーム化が進み、家庭内には、仕事から開放された父親の姿があるだけである。仕事に立ち向つている父親の姿は、もはや家族の目の届かないところになってしまつてい

る。ここにある少年の作文がある。多分寒い地方の子供であらう。

専門家 中二・男子

たしか雪の降つている日曜日だった。父は朝からずっとテレビを見ていた。父はいつも日曜日にはひとりテレビを見ていた。だから

兄から「テレビばかり見て」といわれる。どう説明したらよいかわからないが、くだらない番組でまるで子どもに見えるようなものを、あきずに静かに見ているのだ。ぼくたちは父の趣味の高等でないことを淋しくも思ひ、またケイベツもしていた。ところが昼すぎになって、電話がかかってきた。父へだった。

父は何か話したが、「ああ、ケイシヤは三分の二で……よろしい、モクソクは？ あそこは二万二千円」父はノートを出し目がねをかけて説明している。ぼくには何かわからない仕事の話らしかつた。その時の父の表情はテレビを見ていた父とはまるっきりちがつていた。ぼくは父をえらいと思つた。

非常に純粹で率直な眼を通して映つた、あの日の父の姿が短い文で綴られていた。仕事に對するときと、くつろいでいるときとは全く別人になりきつていような父の姿がくつきりと短かく描かれている。何か考えさせるものを感ずる。

これか迎え入れようとする余暇時代に、自分に向けられる内外からの眼のますます厳しさを増すであらうことを考えると仕事とは、遊びとはについてもう一度反省すること余儀なくされているように思ふのである。

昭和五十二年度

甲陽学院 入学志願者心得
中学校

一、募集人員 男子 約一七〇名

二、出願期間 昭和五十二年二月十二日(土) から二月二十三日(水)まで

上記期間中の日曜日を除き毎日午前九時から午後四時まで(土曜日は午前中)

三、出願手続

(1) 本校事務室で入学志願者名票、写真台紙、調査書用紙、入学調査カードを受け取る。(一組二〇〇円)

(2) 入学志願者名票、入学調査カードに必要事項を記入し、最近撮影の写真(脱帽半身、名刺判五×七cm)を規定の台紙にはりつけること。

(3) 調査書は、二月二十四日(木)までに本校に提出できるよう出身小学校に依頼すること。(調査書は出願のさい父兄が持参されるか、又は出身小学校に郵送を依頼して下さい)

四、入学検査
期日ならびに検査内容

三月一日(火) 筆答検査(国語五十五分 算数五十五分 理科四十五分)

三月二日(水) 筆答検査(前日と同じ)面接及び身体検査(前)

三月三日(木) 面接及び身体検査(後半組)

五、合格者発表
三月四日(金)午後五時本校内に掲示する。

備考 入学金 十万円
授業料 (月額) 一〇、六〇〇円
諸 費 (月額) 五、二〇〇円
生徒会費 (月額) 一三〇円
育友会費 (月額) 二五〇円

会員名簿(昭和53年度版)を刊行するにあたってのお願い

同窓会が全力を結集して会員名簿を作成したのが、いまを去る十年前のことでした。それは創立五十周年を記念したもので従来の名簿とはその内容を一新し画期的なものではありませんが、編集後記にも記されていますように住所不明者の数も少なく完全なものではなかったことは残念なことでありました。

その後五年経った昭和四十七年の夏に新版が刊行されたのですが、編集にあたられた先生方の中に不慮の死があり不十分なまま発行しましたことは編集者にとって甚だ心のこりなことでありました。かくてこのたび高校の新校舎竣工の時期にあわせて、創立六十周年記念の名簿を昭和五十三年五月ごろ(時期は多少ずれるかも知れません)に発行することが理事会で決められ、現在編集の作業が進行している段階であります。勿論一般同窓諸兄には予約を七月発送の甲陽だよりで受け付けますが第一のお願いは広告を掲載することによって援助をしていただきたいこととあります。第二のお願いは毎度の甲陽だよりで所在不明になっている同窓の正確な住所を把握することです。完備した名簿にするためには在校の先生方だけでは到底不可能でありますので何卒積極的な会員諸兄のご協力をお願いする次第です。

ところで今回の名簿は戦後の学制改革によって昭和二十四年三月に卒業した第三十回生即ち新制高校第一回卒業生以後の新しい卒業生の職業、住所の整備に重点をおきたいと考えています。と申しますのは旧制中学校の卒業生は年齢が五十歳以上になつてゐることからして職業の移動がすくなく、甲陽だよりでも返却されてくる比率が新制の卒業生に対し極めて少ないことからほぼ固定していると断

定されるからであります。

以上の次第ですので、第三十回生から二十八年に及ぶ各期に重点をおき名簿を作成したいと考えています。そこで次に各期の代表者を列記しますので会員諸兄におかれましては直接同窓会本部へご連絡下さるか、さもなければ代表委員にご連絡下さるか何卒ご協力のほどお願い申し上げます。

30	回	(昭和24年3月卒)	津路小山
31	回	(25)	坂上近藤
32	回	(26)	吉村河合
34	回	(28)	高木江隈
35	回	(29)	中村沢井
36	回	(30)	藤井新井
37	回	(31)	奥野柴田
38	回	(32)	鶴田新井
39	回	(33)	森田村
40	回	(34)	吉田篠原
41	回	(35)	橋本梶原
42	回	(36)	森本花木
43	回	(37)	波谷本庄
44	回	(38)	中野川
45	回	(39)	高谷小西
46	回	(40)	尤、吉江
47	回	(41)	広部倉本
48	回	(42)	大塚植田
49	回	(43)	池上河原
50	回	(44)	西内矢野
51	回	(45)	清水青木
52	回	(46)	山下牧野
53	回	(47)	足立和田
54	回	(48)	青山合沢
55	回	(49)	水杉菅原
56	回	(50)	平岡鈴木
57	回	(51)	今西中谷
58	回	(52)	今西中谷

会員名簿整理について

甲陽だよりが同窓の皆様に完全に届くように努めています。が、どうも前回届いたのに返って来る状態が繰り返されている。郵送料の値上りのため経費が大変ですので、よろしくお願いいたします。

今回も次の人々のが返送されて来りました。

第四回	泉 勇之介	第三十七回	浦野 宗保 高岡 昭
第七回	梅田 俊平 津村 宗治	第三十八回	樋口 勝 吉田 順治
第八回	青木 重雄 黒田 義博	第三十九回	北川 常夫
第九回	石毛寿一郎	第四十回	大島 隆 前田 隆平
第十回	泉 保治	第四十一回	橋寺 立 永井結士郎
第十一回	肥田富太郎	第四十二回	小村 倫弘 野中 孝弘
第十二回	佐々木捨男 島口 貞雄	第四十三回	石西 清輝 川口平八郎
第十三回	三浦 通雄	第四十四回	神田 晴夫 茂野 藤夫
第十四回	吉村 将男 前田 時輔	第四十五回	北野 徳次 松村 矩雄
第十五回	高田 輝雄	第四十六回	細川 浩利 細野 治男
第十六回	高井 義夫	第四十七回	伊東 武 田中 真征
第十七回	入間田 修 岩谷 和夫	第四十八回	林 邦彦
第十八回	村田 収 北村 修造	第四十九回	梅田 明彦 尾上 暉隆
第十九回	高岡 正周 松沢 美作	第五十回	小林 洋幸 小林 徹
第二十回	白石 保稷 宮津 雅雄	第五十一回	大津 昌彦 中原 洋一
第二十一回	尾原 一平 松本 正之	第五十二回	永田 隆 山田 文雄
第二十二回	溝口 富夫 稲田 太	第五十三回	荻野 和郎 藤原 清富
第二十三回	奥 喬二郎	第五十四回	徳元 俊明 高村 隆司
第二十四回	畑中 弘 波々部繁	第五十五回	山本 秀美 高村 隆司
第二十五回	宮崎 嘉夫	第五十六回	村島 博 平山 孝
第二十六回	福原 宏造 山本 秀樹	第五十七回	巽 安雄 兼輪 一雄
第二十七回	船野 和夫	第五十八回	上西 潤一 森本 保
第二十八回	織部善次郎	第五十九回	森際 康友
第二十九回	西村 昭緒 山田 耕太	第六十回	金井 俊雄 和田 隆
第三十回	藤本 重幸 奥村 章	第六十一回	藤江 隆信 北野 聡
第三十一回	芦辺 昭彦	第六十二回	津野 浩一 中村 安孝
第三十二回	樋口 司朗	第六十三回	藤永 彰夫
第三十三回	井筒 啓之	第六十四回	永井 哲郎 中島 孝裕
第三十四回	岡本 一男 岡本 弘昭	第六十五回	下山 博義 多賀谷晴敏
第三十五回	水口 大和 白井 久夫	第六十六回	鹿山 俊之
第三十六回	吉本 博昭 小川 明	第六十七回	佐脇 一平 宮本 博幸
		第六十八回	石光 真 前田 俊一
		第六十九回	川岸 太郎
		第七十回	百済 孝 古宮善一郎
		第七十一回	福井 豊 広末 修
		第七十二回	金子 良
		第七十三回	亀甲健一郎

夏季大会



第五十七回 同窓会夏季大会 反省事項

二年引続き台風に見舞われて会場設備の変更を余儀なくされたので、本年は最初より屋内に於ける大会を主眼として施行することにしました。

新卒同窓の企画で準備するのは本年で三年目であるが、年々卒業せられる人々の個性が良く表現されて企画も変更されている。前者の反省を土台として続いているのであるが、今西君の反省にあることを参考として五十二年もやっていきたいものだ。石の上にも三年という諺があるように逐次立派な会合となつて、甲陽の特色としたものだと思ふ。参加される老先輩も一日を昔に返つて、甲陽ボーイとして若き後輩と共に益をくみ歓談することが本当の大会の主旨であると思ふ。本年は現職の先生方も万障繰り合せて多数参加して下さい。会もスムーズに行つたと思われるが、なお反省すべき事が多々あった。(合田記)

一、先ず昨年に引き続きゲストを招いた事はよかつたと思う。何よりゲストによつてこの大会に一つの焦点ができたし、ゲストもあてに出席した会員もいたようであった。二、ゲストの人選については、これも難のない線であつたらう。キダ氏がオールド、ヤング共に興味もてるように、ナツメロを巧みに使用して下さつたので、大半の者が楽しめたのではないかとその点、今回のゲストは大成功であつた。次回もゲストを招くならば、その時は、そういう大衆性をもつたというか、広い階層にうける人物を、というのも人選基準の一つであらう。

三、一昨年から「老若共々楽しめるような同窓会」というビジョンは大変高度なものであり、いささかも反対する理由のないものであるが、今回の大会で果してそのビジョンが実現したかと言ふと、少し自信がない。現実には、老若間の感覚(特に笑いのセンス)の相違は、予想をはるかに上まわるものであつたというのが、私の実感であり、それを克服するのは、かなりの困難である、つくづくと感じられた。その点、今回は不十分であつたと言わざるを得ない。(体育館で川淵氏があんなに尽力して下さいにもかかわらず、あまりにも散漫な印象をうけたのは、とりもなおさずこの相違に負けたからであると思ふ)

四、今私が最も残念に思つている事は、今回の同窓会もおそらく例年とたがう事なく、何一つ生産的内容がなかつた事である。というのは、せっかく甲陽で同窓会をやつていながら、現在の甲陽の実態をまるで知らうともせず、あまつたらしいノスタルジアにひたり、それで満足しているような雰囲気を感じられた事である。むろん久しく顔を

合せていなかつた旧友が席を一にするのであるから、なつかしさがなかるはずはなく、そして、そのなつかしさを味わう事が同窓会の大きな目的である事は事実であり、正しかろう。ただ、そんな落ち目テイックな感傷だけにとつぷりとなつていゝのではダメだという事である。

むろんOBが姑の如く、現役の教師や生徒に、ごてごてと干渉しようというのでは決まてない。OBとして現在の甲陽の実態、内在する問題をしっかりと認識する義務が我々にはあるという事であり、現在の甲陽には教限りない問題点が山積みされていゝ。

中学において生徒が丸刈を強制されている事、高校に生徒会執行部が存在しない事、主任制々度化に対する甲陽の対処の仕方……etc. これらにむろんOBは口出しする権利を持たないが、しかし、その実態をしっかりと認知し、暖かい目で見守つてやる義務があると思ふ。その為には、校長の形式的あいさつではダメなのであつて、現役生、新卒者や教頭などの実質的な近況報告も必要になってくるのではなからうか。

五、講堂において左前部に会長などの幹部席を設けたのは、まさかつたのではなからうか。「会員が丸となつて……」という崇高なる理念から考えても。

六、あいさつはやはり長すぎて、冗長以外の何物でもなく、会の緊張感がそこなわれ、会にとつて大きなマイナスとなつたと思ふ。

七、せっかくヤングが企画に加つたのに、会の印象として、ヤングらしい大胆さや斬新性がなく、どことなく年寄り臭くま

つてしまつたのは残念である。ヤングがほとんど活躍したのは準備、あと片付け、給仕などの肉体労働においてだけであり、ヤング的発想、ヤング的理論がまるで反映されなかつた事(五、六などはその一例)は残念であつた。

以上が、今の私の胸中にある主な反省事項であります。「事前準備は現実論で、事後反省は理想論で」というのが私の持論であります。(第57回同窓生・理事 今西 昭)

御礼

小池 与三郎(98才)

拝啓 中秋祭涼の候と相成り、各位您々ご盛昌のこととおよろこび申しあげます。

さて、昨日は懇々宮本、中島岡先生のお使いにより、学院ならびに同窓会から老生の長寿ご祝福を賜り、過分のご芳志誠にありがたく厚く御礼申しあげます。

ご高承のとおり教職五十年の過半を甲陽学院で過ぎて頂きましたため、思い出の数々を今なお家人に話しており、枝川の松嶺に似た時計の時報音は、一層たのしい気持ちに陶酔させて頂けるものとするのであります。

とくに最近老人性白内障の進行に伴い失明いたしましたので、きくことのみが情報源となつております。

ほんとにありがたうございました。末尾乍ら各位の益々ご健勝をお祈りします。

先ずはお礼まで。

九月十一日 敬具

追伸 尼崎に飯寓を移して早くも六年経過しましたが、今年、思いがけなくも尼崎在任の最高年令者となり知事、市長からも祝福をうけました。これも偏に各位のご厚誼によるものと深く感謝しております。

会員だより

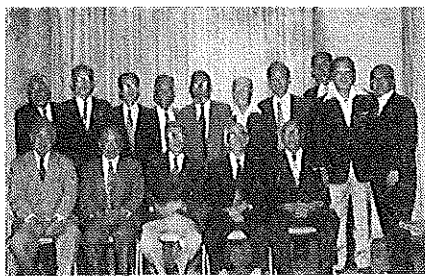
甲陽会(第一回卒)

春の会合が初夏となった、元気で最後まで頑張ってくれる筈の辰馬修一君が亡くなった例年の会合には白鹿の銘酒を持って来てくれたのであるが、名物男の伊東栄君も昨秋亡くなり、なにか淋しい思いがする。

出席の返事があった、東京の土居君、宮崎卯吉君も一寸健康を害されて会合を榮しんでいたのに欠席するとの電話通知を受けた。年を感じるのは淋しい。

斧原君が元気で顔を見せて呉れたのは嬉しかった、十五名の会合となった。合田より昨今の学校の状況、殊に高校移転時や名簿発行を説明し協力を呼び掛ける。夏季の同窓大会も其の年の卒業生の企画、運営であるので、是非一度参加して見て呉れと勧誘した。

辰馬修一君への黙禱、乾杯に懇談と移ったが、どうも健康の保持方法が主となる。未だ一線に活躍しているものがあるが、七十余才と云えば古来稀なりの年である、時代の流れ



である、秋の懇親会は半田の吉田君に企画を依頼してあるので説明を聞き、伊勢賢島に行くことに決めた。年令を考えたので会合として午後三時に集合して六時解散予定にしたが、終わると良い結果となったように思った。

果となったように思った。

秋の懇親会を七月に会合した時吉田氏より説明のあった鳥羽志摩巡りとした。

十月十七日、十八日の一泊であったが秋の好楽シーズンであったので何処もなかなかの人出である。今回は常連の人々も差支えがあつて一行僅か八人である。

異色としては東京より熊倉氏が参加されたことである。一時病気で困っておられたが復され楽しんで参加せられた。

鳥羽に十三時集合して鳥羽湾一周遊覧する。イルカ、アシカの妙技を観賞。石鏡の宿に十七時過ぎ着く。吉田氏の奔走も効なく第一ホテルの方が満員で釣客の舟宿である主家浜の家へ宿る。山海珍味でなくて海の珍味一式である、都に住む者にはとても口にしたことのない活魚料理に腹鼓をうち甲陽会の今後を持ち方を談じる。故辰馬氏よりの懇志を郵送料に充当して持ち耐えていくことにする。

米春の集りも宮崎卯吉氏と広瀬氏とが案を出して春秋の会合の場所を斡旋して呉れる。宮崎氏より数日後六甲山の大阪YMCA大阪基督教青年会研修場に七月二日(土)三日(日)を予約してある由通知を受けた。今から其の日に出席するよう準備を願いたい。昔なつかしい場所で語るのは一入楽しいのである。熊倉氏が常連の御三家(宮崎武男氏、長谷川哲一氏、土居信三郎氏)が欠席で病人の俺れが来たと言談に言っていたが、こんな事もないようにしたい。

翌日鳥羽に引き返して鳥羽一賢島(あご湾を船にて)御座一大王碑波切灯台一箱田山展望台一鳥羽とパールロードを約五時間の観光バス遊覧した。

両日共好天の上暖く愉快な旅、鳥羽にて関東方面二人、京都一人、大阪方面五人と夫々別便にて来春の会合を約して別れた。

(合田生)

生物部OBの皆様へ

生物部OB会では、浅野昌隆先生が母校甲陽を辞められたのを機に、記念誌「ごまぐさ」を発行したり、「生物甲陽」発行の際の母校生物部へのカンパをしたりしてまいりましたことは、「甲陽だより」第22、23号に御報告させて頂きました通りであります。

その効もあり、音信不通でありましたOBの方から御連絡を頂くなどして不備でありましたOB名簿も着々完全なものになりつつあります。

折から、同窓会幹事の中島久先生や浅野先生に代り現在母校生物部の御指導を頂いております中村泰三先生から、昭和53年春に予定されております高校の移転に際し、OB会に母校生物部をより支援してほしいと言うお話がありました。しかしながら、その為にはOBの皆様方にこれまで以上の御協力、御支援を頂く必要があることは申すまでもありません。

そこで、前述のOB名簿の完全化を早急にはかり、一人でも多くのOBの皆様方の御協力をお願いしたいと考えております。現在、母校生物部では、卒業年度によつては、部員の氏名すら把握できないという状況にあり、これまででの行事にあつたことができません。皆様全員にさしあげることができません。したがう方は、お葉書で結構ですので左記幹事まで、是非御一報頂きたく思います。特に、前述の「ごまぐさ」発行に際して連絡をとることができませんでした方は、よろしくお願ひ致します。なお、記念誌「ごまぐさ」はまだ残部がございますので御希望の方は、一五〇〇円を添えてお申し出頂ければ、お送りさせて頂きます。

行ないたいと考えております事業としては、現在次のようなことがあります。

一、新校舎移転に伴い新設が予定されております「生物標本・資料室」の整備と今後の運営について母校生物部を支援、協力していくこと。

二、新校舎移転を機に、甲子園時代の生物部の歴史を集大成し、記録として残すこと。本件は、学校全体として、新校舎落成に伴う行事が実施される場合には、さらに、発展させて考えることになる。

三、生物部OB名簿の完全化をはかることにより、OB相互およびOBと母校の現役員諸君の連絡を密にすること。

以上の三件につきましては、すでに母校の中村先生や現役員諸君と幹事の間で具体的な協議が行なわれており、「生物甲陽」特別号の昭和53年春の発行などが計画されております。

以上OBの皆様方にお願ひ事を申し述べましたが、もう少し紙面をお借りして、母校生物部の現況について御報告させて頂きます。生物部は中村先生の御指導のもとに、ハムスターの飼育観察、西宮市内水系の水質調査など、これまでになかった新しい活動を日常活動として行なってきた。伝統的なフィールドワークとして67年夏には奄美大島で夏季合宿を行ない各種生物の採集観察を実施するなど、幅広く活動中であります。

OBの皆様方には、今後ともOB会への御協力をお願い致しますと同時に、母校生物部への一層の御支援をお願い致します。

△連絡先▽尼崎市西灘波町2-19-19

大塚 昭
△以上▽松宮 徳雄(26) 花木 繁(36)

大塚 昭(42) 中江 史郎(50)

甲陽学院 黒帯会の総会を開催さる

昭和五十一年八月二十一日(土) 母校高校柔道場において久方ぶりに黒帯会の総会が開催された。

次に記す案内状によって総会の模様を想起していただければ幸いである。

甲陽の黒帯会の皆様にはますますご健勝のことと存じます。さて、最近十年間位の卒業の諸君にはまだお知らせしてありませんが、本会は十年ほど前に二回続けて総会を開催いたしました。その時点では会員は百二十名ほどで、出席者は四十名位でした。

この黒帯会は甲陽学院創立当時から柔道部関係者で、オールドボーイから最近のヤングまでを一本にまとめた会で、これと言って固苦しい会則はなく、何かをきっかけに自由に集ると言う実にはフリーな会です。こんなことが言えるのも柔道部が今なお存続していること、創立以来第三回目の道場が終戦後間もなく建てられて健在である。

これによってわれわれ同志は眼に見えない鎖によって繋がれている団結の強固さを肌で感ずることができるとありますと同時にこの心のよりどころである道場と柔道部発展に對してできる限りの協力を惜しまないものがあります。

昨年米オールド大先輩の強いご要望もあって十年ぶりに総会を開催して上は七十二才から若きは十八才までの甲陽健児が同じ道場に於て共に修練に励んだ者同志が古き懐き昔を偲び、現在の複雑な社会の中で闘う苦境から一寸の間抜け出して、明日の楽園を夢みて、大いに語らい励まし合う場といたしたいと思っております。

幸いにも本年は学院の同窓会が八月二十一日(土)十四時から開催される運びとなりました。この機会にできるだけ多勢の同志のご参加をお願いいたしますと存じます。

天文会 発会報告(第二十五回卒K組)

(北村先生を偲びながら)

苛烈なる戦争のさなかに母校を巣立った私達四年橋組の級友達が久しぶりに(人によつては三十年ぶりに)淀屋橋の一角清友会館に集まって懐旧の情にひたつたのは十月十六日(土)そろそろ朝夕に肌寒さが感じられる頃でありました。

遠くは東京からも馳つけけた永田、片山の両君を始めそれぞれ忙しい仕事をもつ働き盛りの連中、総勢二十二名が一堂に会するを得たのは全く今は亡き恩師北村先生のご遺徳のしからしむる所と改めて感銘を深くした事でありました。

会を始めるに先立ってまづ恩師の冥福をお祈りして黙禱を捧げました。小グループでの集まりは今までに数回もたれてはじめてでしたがこれだけの人数が集まったのは始めてであり計画を立て住所も定かでない人達を、たづねる労も厭わず自己の仕事も一時は犠牲にして奔走していただいた小松、吉田、村上談一、能美の四君には全くお礼の言葉もありません。改めて深く感謝の意を表したいと思います。

さて会場に集まった連中は最初はお互いの顔をじろじろみる事から始まったようです。何分三十年余の風雪を隔てての再会であり、とつさの出会いではお互いの確認がなかなかとれず戸まどいの一幕もあつたようです。

特に恩師北村先生についての思出はつきませんでした。人の真価は棺を覆うて定まるとは恩師の言でありましたが先生の真価はまさに今慈愛として輝く鏡があります。誠実な教育者として一貫して私達に接していただいた事が今になってひしひしと感じられます。

私達が在学していた時代は太平洋戦争が次第に破局的な様相を呈してきていた時代であり私達をとりまく環境はまことに厳しいの一語につきる時代でありました。お互い明日の生命が分らない...そんな時代でありました。

懐かしい母校の学び舎で学習に励み得たのは三年生まででそれ以後は私達は尼崎の日本放送電(現関西電力)で日夜生産活動に従事したのでした。そのような厳しい時代に青春の一時を共有した私達の間には現在の若者達にはみられない一種の戦友愛がみられるのは当然といえましょう。戦地で散った級友達も二、三にはとどまらないのです。そういう背景で考えると二十名をこす人間が集まり得たのは一種の奇跡ともいえますよ。

三十年...それぞれ異なる人生の辛酸を経た二十二名のむくつき男達が童心にかえって顔をくしゃくしゃにして母校の思い出話を話を忘れた数時間...まことにほほえましく又充実した時間でありました。

最後に誰いうとなくこの集まりを定例的に継続しようという提案がなされ今後二年毎秋に例会をもつという事と、本会の名称を北村先生のニックネームをいただいて天文会(二十五回卒)とする事に決定しました。(生前先生より内諾を賜っている。)尚次回の幹事を引きつづいてご苦労ではありますが小松、吉田両君にお願いし助手として松井がお手伝いする事になりました。

最後に末長くこの会合が和やかにもたれる事を祈って報告を終わります。(文責 松井) 当日出席者(順不同)

- 小松、吉田、村上(誠)、上川、能美、池田、井上、新美、織田(旧山本)、土井(旧渡瀬)、森山、谷元、吉村、押貝、永田、片山、河南、浅香、畑中、有山、森、松井

住友電気工業

甲陽会

76年度の「住友電気甲陽会」が、去る七月二日、76年四月入社の高原晴三君(45年卒)の歓迎会を兼ねて、大阪は曾根崎のミュンヘンで開催され、十三名が出席した。

住友電気甲陽会 は今度で四回目、会員数も高橋君を加えて二十二名、会社内にあつてはユニークな高校の同窓会として、年一回愉快な一夕を過しております。

当日は、勤務先の関係で欠席されました事実上の発起人格の中村惇二先輩(35年卒、横浜)を始め、上野淳三(34年卒、東京)、多田英昭(38年卒、ニューヨーク)、神田泰夫(41年卒、横浜)、高階誠(44年卒、鹿沼)の各氏を除く在阪メンバー十七名中の十三名が出席した。会は、出席者中最年長の小松啓七先輩(34年卒)の音頭で乾杯した後、ワイワイガヤガヤ(本当は上品で高級な話が多い...?)やっている内に予定の2時間があつと言うまに近づき恒例の各人の近況報告は省略、高橋君の自己紹介を行なったところ「...今秋結婚します...」ときて、居並ぶ独身先輩達から色々クリームが飛び出し、それを「嫁さんの来てもないヤツが何を言うか」と既婚先輩達がひっかき回すというしめくくりとなりました。

なお、二年余、ニューヨークに勤務しておられました多田英昭氏は、十一月初め元気に帰国され、新たな仕事に取り組んでおられます。当日の出席者は次の通りです。()内は卒業年。

- 小松啓七(34)、土肥嘉夫(36)、西園寺幸夫、笹部博史(37)、中田秀一(38)、吉井明夫(40)、篠林利彦、飛岡正明(41)、大塚昭(42)、中山平敏、中堀知(44)、磯嶋茂樹、高原晴三(45)。(以上大塚記)

第二十五回生(昭二十年卒)

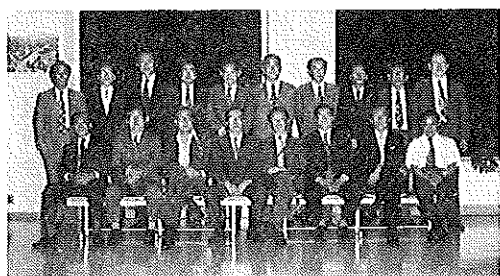
甲 桃 会

秋たけなわの好期、母校および貴会におかれては益々御隆盛の御事とお慶び申し上げます。

早速ながら第二十五回卒業桃組が開催して、いま甲桃会の例会が、本年六月十一日三十三周年(卒業後)を記念して中之島センタービル三十一階トップブラウジンNCBにおいて行われましたので御報告申し上げます。

憶いおこせば私達二十五回生は昭和十六年大東亜戦争勃発の年に入學し、戦時教育を受け、後期は学徒動員で吉原製油へ生産拡大の応援に、そして昭和二十年終戦の年に卒業という甲陽学院五十六年の歴史のなかに於いて異色の同窓生であると思っております。

人間形成の一番大切な時期(思春期)をこのような境遇で育った私達が、その環境に負けないためお互いに旧交を暖め、助け合い、勵まし合うために桃組で育った各同窓生の住所、勤務先を調査して甲桃会を催すようになって早や二十四年になり、その間、各員の努力によって只



今では約五十名の同窓の内、三十八名の多数になったことは誠に喜ばしい限りであります。毎回仕事の都合等で欠席者もあり、また、全体二十名前後の集りを見るに至りました。

今年も満三十周年でもあるため、盛大に一泊二泊の旅でもと考えましたが、何分にも世界的な不況には逆らえず、節約の内に鋭意の養生を考慮し、中之島センタービル三十一階トップブラウジンNCBに於いて、夜空にきらめく無数の星に希望を託し、阪神間の輝くネオンの街を睥睨して、大いに意気あがる会となりました。

他方、恩師諸先生については、戦時中の授業過少時代の私達にとっては、直接教育を受けた先生の数は少なく、また、老先生が多かった事も原因して、その点恵まれず今日、連絡のとれる先生は、芳郎先生のみであり、当日も御出席の予定であったが、商用のため止む得ず欠席となりました(芳郎先生はもと地理を教えられ、吾桃組の一年生時代ご担当であり、現状は大浪運輸の社長をされておられます)が、盛會裡に終った事をご報告申し上げます。

学 年 会

岩井、池内、五十嵐、大國、大塚、小納、折見、勝間、国松、田中邦、長瀬、西田、増田、山崎、山田、髙部、(幹事)松原、大西の十八名でありました。(文責 大西)

十年ぶりの御対面！といえは、何やら流行のテレビショーめくが、四十一年卒業以来初めてという記念すべき同窓会が九月二十八日、大阪はキタの中華料理店「北京」で開かれた。「あとにも先にも恐らくこの一回限り」というかつてのリトルジュエントルマンらに盛況で満足すべきものであった。

うわけで、春にはA組から倉本、広部、山崎、B組から越智、C組から野々村、D組から野口の各君が選ばれて幹事団を結成。それぞれの連絡網を頼りに次々と網の目を広げ、涙ぐましい努力の末(幹事談)に、計二百七名の四十二年卒業生のうち百八十名の居所を突き止め、さらにうち六十五名の出席確約を得て、甲陽学院史上特集すべき(再び幹事談)同窓会が開かれるに至ったのである。

当日の御出席の諸兄は、

当日午後五時、何やら見たことのある顔やさっぱり思い出せぬ顔が一人二人と現われ「エート、君は確かか？」などときこちなき挨拶が交わされ「十年ぶり」の面目(?)も躍如といったところ。しかし、酒の勢い増すとともに、学生時代同様、不思議に成績順に整理されたグループがそこかしこに出来「お前、まだ生きとったんか」とさっぱり十年の成長感させぬ咆哮も飛び出し、冥たけなわ。

三谷、山岡、吉本の三先生は残念ながら病氣、やむをえぬ事情などで欠席であったが、中島先生のご出席をいただき、順に自己紹介。医者、商社、建設関係が大半を占め「ええコネでできるな」とのツブヤキも。幸か不幸か、名前通りぬ中小企業に勤める輩には、肩身狭き思いをした者もいるが、三十わずかに前の同窓生には「お前課長、オレ平社員」の「差別」いや、区別もなく、まず和気藹々。

二時間半にわたる宴終えるころには、独身から二児の父親までおしなべて学生気分に戻り、あるいはその錯覚に陥り、三々五々、二次会へと消えていった。

なお、当日の出席者、やむを得ぬ急用ができた者などあつて総勢五十八名。その後伝え聞くところでは、テニス部OBが定期的なテニス大会を企画するなど、この同窓会をきっかけに、さまざま旧交が復活しているという。(文責 前川)

計 報

左の方々の計報に接しました。謹しんで御報告を申し上げますと共に御冥福をお祈りします。同窓会よりは弔辞をお贈りしました。

中井敏雄先生(なかい・としお)甲陽学院高校元教諭)

一月三日午後脳溢血のため尼崎市の自宅で死去三三歳。告別式は五日午後二時から尼崎市西本町三丁目六二番の自宅で行なわれた。喪主は長兄中井信彦氏。

甲陽学院教職員、卒業生多数参列した。先生は天理大学体育学部卒業後四十四年県立城内高校に奉職され、四十五年から甲陽学院高校の体育科教師として活躍された。

体操部、ハンドボール部、軟陸部等の顧問をされ甲陽にあつてはユニークな人柄の先生として多くの生徒から親しまれた。四十八年病氣のため退職され自宅療養中だった。

池田 徳太郎(第二一回)

昭和五十一年十一月二十五日 井上 孝 治(第一回)

昭和五十一年八月十八日 静 敬 三(第八回) 不明

井 阪 一 男(第十五回)

昭和五十一年四月二十九日 高 畑 吾 郎(第二十一回)

昭和五十一年十一月十八日 森 山 浩 光(第二十八回)

昭和五十一年三月 吉 田 寛(第三回)

昭和五十一年一月八日